

白樺サロンの会 設立趣旨

〔名称〕

1. 本会を「白樺サロンの会」と称する。

〔目的〕

2. 本会は、奈良高畑界限に残された遺産の継承とその文化の発展をはかることを目的とする。この遺産とは、とくにつぎの二棟の建物（登録有形文化財）を指す。

①志賀直哉旧居（奈良県指定有形文化財）

②中村家主屋（旧足立源一郎邸）

〔事業〕

3. 本会は前条の目的を達成するために、以下の事業をおこなう。

①研究会、講演会の開催

②冊子、会誌等、必要な公刊事業

③その他、本会の目的達成に必要な事業

〔会員〕

4. 会員は、本会設立の趣旨に賛同する者をもって構成される。〔その他の事項〕

5. その他必要な事項について、協議する。

白樺サロンの会の活動

（平成29年5月～平成29年11月）

平成29年度 志賀直哉旧居特別講座「美と文学の東西、文明としての戦後―志賀直哉旧居から―」 第三月曜、時間…10時30分～12時（一部、午後2時～3時30分）

①5月15日 郭 南燕 国際日本文化センター准教授

なぜ志賀直哉は日本語を捨てようとしたのか？

戦後、志賀直哉は日本語の代わりにフランス語を採用したらどうか、と提案し、物議をかました。近代日本語散文の最高峰といわれる志賀は、なぜそのようなことを言い出したのか。志賀の日本語観を辿りながら、26年間も続くその日本語放棄論を分析し、志賀文学のもつ日本語の特質を解明する。

②6月19日 呉谷充利 建築史家 相愛大学名誉教授 文学に見る東西―志賀直哉と谷崎潤一郎の関西移住―

志賀直哉と谷崎潤一郎の関西移住はじつはかれらにとつて新たな文化の経験でもありました。志賀は東洋の古美術に惹かれ京都からさらに奈良に居を移し、谷崎は関東大震災を逃れて兵庫に移り住み、大阪弁に魅せられます。二人は江戸、東京にはない上方、関西の美の世界に触れ、自身の作品をさらに深めていきます。「いき」と「すい」という東西の美意識に着目して、改めて志賀と谷崎の関西移住を考えてみたいと思います。

③ 7月17日（午後） 平瀬礼太 美術史家

日本洋画の揺籃期から 西日本を中心に

最近、美術界では仏像や江戸絵画が隆盛を誇っている。一方で以前は人気を博していた近代洋画は展覧会でも入場者を集められない。一世を風靡した梅原龍三郎や安井曾太郎さえもその例外ではない。そんな時期であるからこそ、西洋絵画と日本美術の伝統を引き継ぎながらそれらを巧みに融合させて、類例のない独特の魅力を形成している日本の洋画にあえて焦点を当ててみたい。

④ 8月21日 吉川仁子 奈良女子大学准教授

森鷗外と奈良―森鷗外「奈良五十首」をめぐって

森鷗外（1862-1922）は、大正7年から大正11年にかけて、帝室博物館総長兼図書頭として、正倉院の曝涼、開扉の期間に毎年奈良を訪れました。その際の体験を素材とするのが「奈良五十首」です。大正7年秋の訪寧時の日記「寧都訪古録」などを照らし合わせながら、鷗外の奈良の寺巡りをたどってみましょう。ちなみに、鷗外の大正10年11月13日の日記に、正倉院入倉者として志賀直哉の名前が書き留められています。

⑤ 9月18日（祭日） 東浦弘樹 関西学院大学教授

アルベール・カミュの『転落』を読む

アルベール・カミュの中編小説『転落』（1956年）は、ジャン・パティスト・クラマンズと名乗る謎の男がアムステルダムにある場末のバー「メキシコ・シティー」で偶然隣り合わせた男に4日間に渡ってひたすら喋り続けるという実に奇妙な小説で

す。クラマンズは一見身の上話をしているようですが、時間的順序はばらばらであり、始終脱線します。本講座ではこの作品をブッククエリーモアと語りの順序という2つの観点から読み解いていきたいと思います。

⑥ 10月23日 松川綾子 奈良県立主任学芸員

幻の画家・不染鉄（ふせんてつ）（国民文化祭記念講座）

特別展「没後40年 幻の画家 不染鉄」（仮称）の開催に際して、東京都・小石川で住職の子として生まれた日本画家・不染鉄（1891-1976）は、大正大学、日本美術院研究所を経て京都市立絵画専門学校に入学。在学中に帝展で初入選を果たすなど華々しい活躍を見せますが、戦後は画壇から離れ、奈良で独自の絵画世界を展開しました。20年ぶりとなる回顧展の開催に際し、本講座では、伊豆大島での経験などをもとに独特の理想郷の世界を表現した「幻の画家・不染鉄」作品の魅力を紹介します。

⑦ 11月20日（午後） 橋元淳一郎 相愛大学名誉教授

宇宙と生命の謎を追う―数式なしのやさしいサイエンス

宇宙の果てはどこにあるのか、究極の素粒子はどんな構造をしているのか、そして生命はどのようにして誕生したのか。古代ギリシャの頃から人類はこうした謎を追い求めてきました。そして20世紀の科学は、こうした宇宙の謎を次々に解き明かし、思いもよらぬ事実を明らかにしましたが、21世紀になって謎はますます深まるばかりです。本講座では、最新の宇宙と生命の謎を、数式を使わずやさしく分かりやすく解説します。

編集後記

橋元淳一郎氏「一兆年の宴」。われわれは星空に宇宙を見る。その夜空の真の姿が数行に描かれる。無辺奥底にわたる大自然の深部が物理的知見に明かされる。論稿は宇宙がわれわれの知にとつて衝撃的なものであることをいう。真実は逆説に満ちている。別にいえば、科学の母たる一文学の存在である。この数行に結実する強靱な科学的思考を遇れば、青年の日の「未知との遭遇」たる一文学があつた。

東浦弘樹氏のカミュをめぐる一文「アルベール・カミュ、その愛の記録——カミュ・カザレス往復書簡集一九四四〜一九五九——」は、すでに一文学作品である。それほどまでにカミュとカザレスの往復書簡に見る人間の真の記録を描き出している。人間の罪は時に赦される。それに立ちはだかる現実には唯その美を浮き上げらせる。一文は音楽的情感をもつて一幅の絵画でさえある。

平瀬礼太氏の「住喜代志の戦争」は、戦争美術展と戦後のファッション業界における住喜代志の活動について光りを当てた一論稿である。暗躍というものではないにせよ、世にその名を目立って知られることなく、戦中から戦後に生き、時代の美術展に関わってその演出をおこなった影の主役ともいべきこの人物への関心

を著者は書く。美術を社会から考える一視点が明確にされる。

呉谷充利の「柳宗悦と志賀直哉の思索」は民族と人類という二つの問題について書いている。われわれが今日の世界に見ているものは一つにつながる世界とそうはならない世界の別の姿である。民族と人類は別言すればいわゆる文化と文明である。このことが、自我の問題を交えて文化の側から論じられている。文末の言葉を引き、柳等に見る文化論は文化の固有性と文明の普遍性を一つにしている。

吉川仁子氏による池田小菊未発表小説の翻刻・解説は、前誌『白樺サロン』二号所収「東京」三号所収「指」に始まる。以来「りずむ」創刊号「思はぬ旅」第三号「ナハロフカ（無能者）」第四号「淋しき存在」第五号「彼女の犯罪」第六号「朝顔」とつづき、今号、吉川仁子氏による「落葉」の翻刻・解説である。世相と人間の葛藤が大正末から昭和にわたる奈良を舞台にみごとに描かれる。

(MK記)